

# 新書本の主題範囲

今 村 成 夫

## 要旨

新書本というメディアの特性に関する調査の一環として、複数の新書本シリーズを対象に調査をおこなった。対象とした新書本シリーズの主題範囲を、図書館の分類をてがかりにしらべた。いずれの新書本も、ほぼ類似した主題の分布となっていること、特段の経時的な変化はみられないこと、新書本をも含めた図書全般の主題分布とくらべて大きな相違点はないことが判明した。

## 1. はじめに

新書本の役割・機能について考察するため、前報文<sup>1)</sup>において、新書本ではもっとも歴史の古いシリーズのひとつである、岩波書店刊の岩波新書を例に、その造本の概要と主題範囲の概要についてしらべた。しかし、時代の変遷による造本の状況や主題範囲の状況について、岩波新書の場合には、大きな変動は認められなかった。それでは、他社発行の新書シリーズの場合には、どのような状況になっているのか。本稿では、他の新書本について、その主題範囲の状況をしらべた。

前報文<sup>1)</sup>においても言及したとおり、新書本は、価格が廉価で、単行書にくらべてサイズも小さく、文庫本同様に携帯にも便利である。総ページ数(つまりは総文字数)は単行書にくらべて少なく、読み通しがしやすいことなども特徴であるといえる。小規模であることはまた、一般の単行書にくらべ

タイムラグの少ない出版・流通が可能であり、そのために何らかのあたらしい主題、現代社会のあらたな課題など、社会が注目しているトピックを機に臨んで取り上げ、論述する場としても有利であろうと考えられる。紙を利用したメディアの中で、もっともタイムラグが少ないものは逐次刊行物、とりわけ雑誌や新聞であるが、新書本は、文庫本とならび、紙のメディアの中では、そうした雑誌や新聞の記事に次いでタイムラグが短いメディアでもであろうと考えられる。単行書と雑誌・新聞との中間的な存在であるといえよう。そのため、新書本で取り上げられている主題範囲も、他の単行書とは異なる分布となっている可能性が考えられる。実際、書店店頭に平積みされている新書本の多くは、社会における新しい話題のものが中心であるようにも見える。

新書本はこのように大変なじみやすい図書であり、タイムラグが短いなどのすぐれた特長を有しているといえる。そうした特長のためであろうか、前報文<sup>1)</sup>でも触れたとおり、2005 年ごろ以降に、これまで新書本を手がけてこなかった出版社による新規参入が相次いだ。「新書総合目録 2007 年版」<sup>2)</sup>によれば、2006 年 5 月現在で新書の出版点数は現在出版中のものだけで 13,307 点全図書出版点数の 1 割以上にのぼる。出版年鑑<sup>3)</sup>の第 1 巻、出版概況中の新書欄には、『前年に続いて、06 年も新書の新規参入が止まらない。』と記されている。実際、「ソフトバンク新書」(ソフトバンククリエイティブ)、「PHP ビジネス新書」(PHP 研究所)、「MYCOM 新書」(毎日コミュニケーションズ)、「ゴルフダイジェスト新書」(ゴルフダイジェスト社)、「サイエンス・アイシリーズ」(ソフトバンククリエイティブ)、「朝日新書」(朝日新聞社)、「幻冬舎新書」(幻冬舎)など、複数の出版社が相次いで新書を創刊した。朝日新聞<sup>4)</sup>の報道によれば、2008 年 9 月にもマガジンハウス文庫と小学館 101 新書が創刊されるなど、あたらしい新書本の創刊はつづいた。こうした新書本の読者層は、従来からの読者層に加えて、ティーンエイジャーから 30 歳代までの若年層が増えているとされ、TV ニュースの報道によれば、大学生などからの人気も高いとされている。現在の新書ブームについて、前出の「出版年鑑」<sup>3)</sup>の出版概況欄(新書)では、

『めまぐるしい社会環境の激変に晒され、人々はすぐに役立つ手軽な

先端の知識を求めているともいえる出版現象であろうか。(中略)そこに見えてくるものは、出版不況を払拭したいという各出版社のコンテンツの強みを生かしたあつい戦略だ。』

と記している。

しかし、形態的・数量的な特徴以外に、具体的にタイムラグはどの程度で、どのような主題やレベル、どのような“鮮度”の情報を、どの程度伝えるメディアであるのか。雑誌（逐次刊行物）や図書、文庫本、などの類似したメディアとくらべて、伝達される情報などに具体的にどのような相違があるのか。こうした事柄は明らかではなく、評論的な論述を除けば先行研究も見あたらぬ。現在、「新書本」というメディアの特性について、さまざまな側面から定量的・定性的な分析をすすめている。

本研究は、そうした一環として、新書本4種類を例に、主題範囲とその時間的変動に関しての把握と比較をこころみた。

## 2. 新書本発行の歴史的経緯

前報文<sup>1)</sup>でも記したが、ここで、日本における新書本発行の歴史的経緯について、簡単にまとめる。

出版年鑑<sup>3)</sup>によれば、新書本では岩波新書がもっとも古く、1938年（昭和13年）に最初のシリーズが創刊されている。それまでこうした規模の図書や叢書はみられなかった。そうした中での創刊のきっかけは、岩波書店の編集部スタッフであった、吉野源三郎（「岩波新書の50年」<sup>4)</sup>に収録）によれば、戦前の社会体制の変容の中でこうした新しいメディアの必要性を感じていたところへ、米国で「ペリカンブックス」と「ペンギンブックス」という小型の版の図書が相次いで発刊されたことが発案のきっかけになったという。

発刊の意図についてはまた、岩波書店の創始者である岩波茂雄による新書「発刊の辞」に記述が見られる。そこでは、「今茲に現代人の現代的教養を目的として岩波新書を刊行せんとする。」と記している。当時すでに刊行され

ていた文庫本（岩波文庫）とはまた異なる意図のもとで新書が創刊されている。

岩波新書発刊の経緯については、上述とは別に「岩波新書の 50 年」<sup>5)</sup> の巻末に発刊の辞が記されており、そこに以下のような記述が見られる。（他の岩波新書にも同じ記述が掲載されているが、赤版、青版、黄版……と新シリーズ刊行のたびに記述も改訂されている。）

岩波新書は、1938 年 11 月に創刊された。（中略）創刊の辞は、道義の精神に則らない日本の行動を深憂し、権勢に媚び偏狭に傾く風潮と他を排撃する驕慢な思想を戒め、批判的精神と良心的行動に拠る文化日本の躍進を求めての出発であると謳っている。（中略）1977 年、岩波新書は、青版から黄版へ再び装を改めた。（中略）より一層の課題をこの叢書に課し、閉塞を廃し、時代の精神を拓こうとする人々の要請に応えたいとする新たな意欲によるものであった。即ち、時代の様相は戦争直後とは全く一変し、国際的にも国内的にも大きな発展を遂げながらも、同時に混迷の度を深めて転換の時期を迎えたことを伝え、科学技術の発展と価値観の多元化は文明の意味が根本的に問い直される状況にあることを示していた。（中略）豊にして勤い人間性に基づく文化の創出こそは、岩波新書が、その歩んできた同事態の現実にあって一貫して希い、目標としてきたところである。（後略）

この発刊の辞から、岩波新書は、異なる分野相互の知識の交流のため、教養書あるいは啓蒙書として、各時代の社会における種々の課題や学問分野・領域の新旧の知識、社会の現状を、広く伝達するメディアとしての役割期待のもとに創刊されたものであることがわかる。

その後 1950 年代に至り、世界情勢の急激な変動により、日本では急激な経済的不況が生じた。出版界も例外ではなく、「岩波新書の 50 年」<sup>5)</sup>によれば、そうした 1952 年頃から、軽装版や新書版などの叢書（シリーズもの）がブームとなった。光文社の「カッパブックス」は、1954 年に創刊されている。『当時、軽装版・新書版のシリーズは 93 種類あるといわれた。出版界は一般的傾向として、大量生産による低価格志向が顕著になっていった。』と記述さ

れている。

それからおよそ 10 年を経た 1960 年代前半に、あらたに中央公論社の「中公新書」、光文社の「カッパ・ビジネスシリーズ」、筑摩書房の「グリーンベルト・シリーズ」などが相次いで刊行され、各社の新書販売部数も増加している。

岩波新書では、その後も高度成長期の日本社会の中で活発に新刊発行が続いた。「岩波新書の 50 年」<sup>5)</sup>によれば、1987 年（昭和 62 年）まで、毎年 30 ～ 38 件の新刊発行がおこなわれている。

1988 年以降については、「出版年鑑」<sup>3)</sup>（1990 年版～2007 年版）によれば、岩波新書は毎年 50 点から 60 点台が刊行された。そして、2005 年頃より各社のあたらしい新書本創刊ラッシュが起り、以降現在まで続いている。「新書総合目録」<sup>2)</sup>によれば、2006 年 5 月の時点で、73 社が合計で 13,307 点（刊行中のもののみ）を出版している。

岩波新書の創刊、1952 年頃の新書・軽装本発刊ブーム、1960 年代前半の新書発刊ブームの原因は、日本社会の景気変動（景気の低迷）や社会体制の変容など、それぞれ社会システム中になんらかの変化が生じている時期と呼応しているように見える。

### 3. 新書本 4 種類の出版状況の調査

#### 3. 1. 対象とした新書

以下の 4 種類の新書を対象とした。

- ・岩波新書（岩波書店）
- ・中公新書（中央公論社）
- ・講談社現代新書（講談社）
- ・文庫クセジュ（白水社）

これら 4 種を選定した理由は、いずれも、第二次世界大戦前もしくは戦後直後など創刊が古く、しかも現在または最近まで長年にわたり継続的に出版を継続しており、経年的な変容を把握しやすいためである。これ以外にも多数の出版社から多数の新書が刊行されているが、途中で廃刊になってしまっ

ていたり、最近参入をしてきたシリーズが多く、相互の比較が難しい。このため、今回は対象としなかった。

### 3.2. 主題範囲の調査

オンライン書誌データベースである「BOOK PLUS」(日外アソシエーツ社)を利用した。

同データベース検索画面上で、全文検索フィールド(タイトルフィールドを用いても結果は同じになった)へ新書のシリーズ名、期間フィールドへ、終戦後10年ごとの期間、すなわち1945-1954、1955-1964、1965-1974、1975-1984、1985-1994、1995-2004までの各区間をそれぞれ順次入力した。同時に、分類区分フィールドへ日本十進分類法第9版の第一次区分(0～9)の記号を前方一致の条件で入力して検索をおこなった。なお参考までに2005-2013の発行数もしらべた。また、全図書(単行書、文庫本、新書本含む)の発行点数も併せてしらべた。

表3.2.1 日本十進分類法第9版における主題区分(第一次区分)概要<sup>10)</sup>

#### 日本十進分類法 第9版における主題区分

- 0類……総記(図書館、図書、百科事典、一般論文集、逐次刊行物、団体、ジャーナリズム、叢書)
- 1類……哲学(哲学、心理学、倫理学、宗教)
- 2類……歴史(歴史、伝記、地理)
- 3類……社会科学(政治、法律、経済、統計、社会、教育、風俗習慣、国防)
- 4類……自然科学(数学、理学、医学)
- 5類……技術(工学、工業、家政学)
- 6類……産業(農林水産業、商業、運輸、通信)
- 7類……芸術(美術、音楽、演劇、スポーツ、諸芸、娯楽)
- 8類……言語
- 9類……文学

## 4. 新書4種類の分野別出版状況

### 4.1. 岩波新書の主題範囲

各発行年の岩波新書が収録している主題の範囲は、表4.1のとおりである。

表 4. 1 岩波新書の NDC の区分別点数 (冊)

岩波書店	総記	1 類	2 類	3 類	4 類	5 類	6 類	7 類	8 類	9 類	計
1945-1954	4	24	57	45	36	6	6	19	2	21	220
1955-1964	3	26	62	106	27	25	16	9	8	24	306
1965-1974	2	31	70	93	37	19	14	20	4	30	320
1975-1984	8	26	52	96	52	24	10	20	15	37	340
1985-1994	3	6	22	33	13	7	8	15	5	12	124
1995-2004	4	5	19	32	8	8	2	6	7	10	101
2005-	0	2	6	11	2	0	2	1	0	3	27
計	24	120	288	416	175	89	58	90	41	137	1438

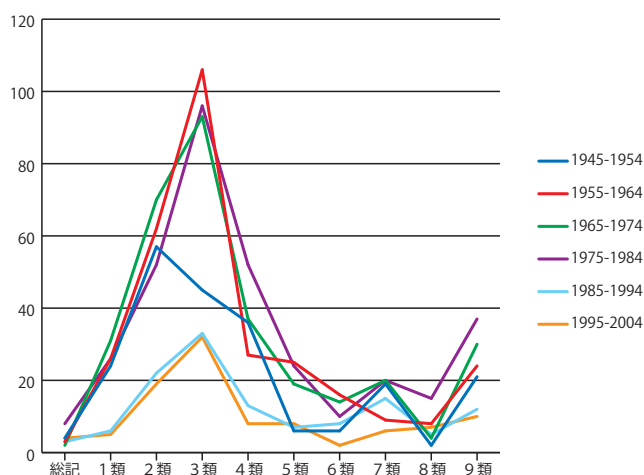


図 4. 1 岩波新書の NDC の区分別点数

全期間を通じて、2 類（歴史、伝記、地理、地誌、紀行）、3 類（社会科学全般）、および 9 類（文学全般）の主題の資料がとくに多い。7 類の資料も 1990 年代後半には多い。3 類は、1960 年以降に急速に刊行点数が増えている。

5 類（技術・工学全般）、6 類（産業全般）は、全般に少ないが、1970 年代後半から増加をしはじめている。主題（類）の間の比率は、上述のとおり自然科学・技術・産業系統が 70 年ごろより増加を示している点を除けば、創刊時と大きな変化は見られなかった。

4. 2. 中公新書の主題範囲

各発行年の岩波新書が収録している主題の範囲は、表 4. 2 のとおりである。

表 4. 2 中公新書の NDC の区分別点数

中公新書	総記	1 類	2 類	3 類	4 類	5 類	6 類	7 類	8 類	9 類	計
1945-1954	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1955-1964	2	5	19	9	4	1	5	7	2	2	56
1965-1974	2	25	70	83	28	10	11	10	4	23	266
1975-1984	8	18	76	67	41	20	19	22	10	21	302
1985-1994	1	4	10	12	11	5	3	3	0	4	53
1995-2004	1	4	2	6	0	1	2	0	1	0	17
2005-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
計	14	56	177	177	84	37	40	42	17	51	695

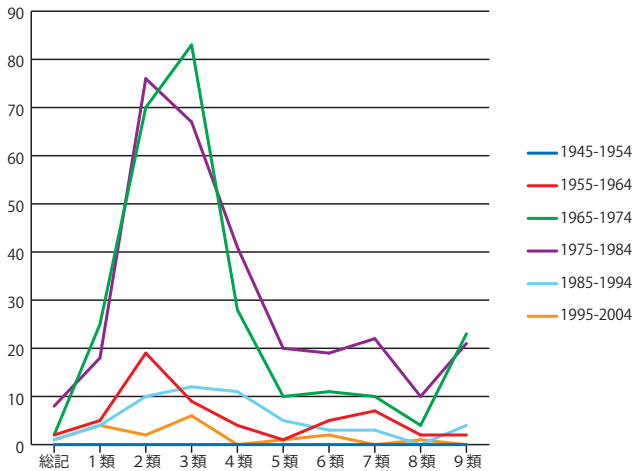


図 4. 2 中公新書の NDC の区分別点数

中公新書でも、2 類、3 類、7 類、9 類にピークが見られた。中公新書は、1960 年代から 1970 年代の間には、1 類、2 類の点数が大幅に伸びている。それ以外の時期の出版点数は、不況などにより同社が経営不振に至っていた時期であることも関係しているものと見られる。



#### 4. 3. 講談社現代新書の主題範囲

各発行年の講談社現代新書が収録している主題の範囲は、表 4. 3 のとおりである。

表 4. 3 講談社現代新書の NDC の区分別点数

講談社現代新書	総記	1 類	2 類	3 類	4 類	5 類	6 類	7 類	8 類	9 類	計
1945-1954	0	0	0	3	1	0	0	1	0	0	5
1955-1964	3	7	5	9	4	2	0	2	3	55	90
1965-1974	6	69	64	63	32	6	2	11	14	33	300
1975-1984	13	58	60	74	28	7	9	28	33	30	340
1985-1994	6	10	5	15	3	1	1	3	5	3	52
1995-2004	1	2	2	4	0	0	0	0	2	0	11
2005-	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計	29	147	136	168	68	16	12	45	57	121	799

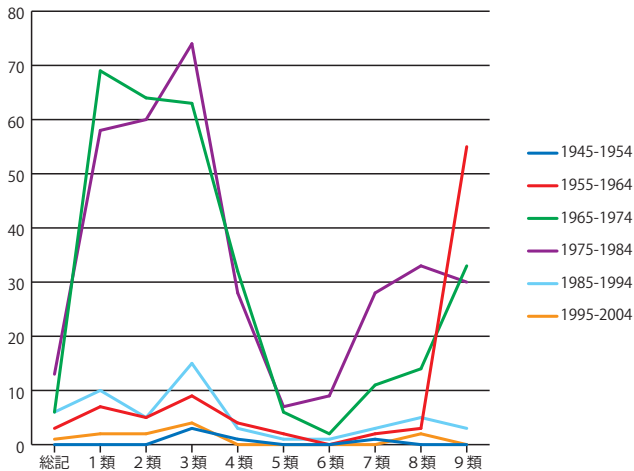


図 4. 3 講談社現代新書の NDC の区分別点数

講談社現代新書は、1 類、2 類、3 類および 7 類、8、9 類の点数が多く、とりわけ 1960 年代から 1970 年代の 1、3 類点数が顕著である。この傾向は、4. 2. の中公新書の様子とも類似している。なお、ピークの数が今回調査した他の新書よりも多い。1955 年から 1964 年には、9 類に大きなピークも見られた。

4. 4. 文庫クセジュ

各発行年の講談社現代新書が収録している主題の範囲は、表 4. 4 のとおりである。

表 4. 4 文庫クセジュの NDC の区分別点数

文庫クセジュ	総記	1 類	2 類	3 類	4 類	5 類	6 類	7 類	8 類	9 類	計
1945-1954	1	13	14	25	36	6	4	9	1	7	116
1955-1964	2	34	20	32	36	8	4	19	5	11	171
1965-1974	2	26	33	51	34	8	7	21	12	8	202
1975-1984	3	7	28	22	4	2	6	9	6	14	101
1985-1994	0	4	2	4	1	0	0	0	0	1	12
1995-2004	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
2005-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	8	84	97	134	111	24	21	59	24	41	603

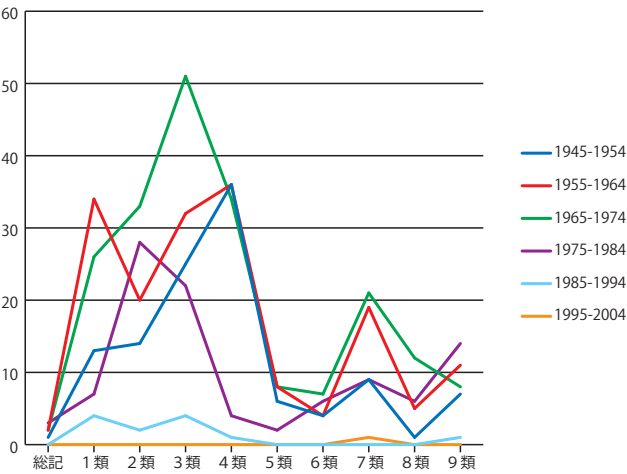


図 4. 4. 文庫クセジュの NDC 区分別点数

文庫クセジュは、時期によっても変動するが、1、2、3、4、7 類がとりわけ点数が多い。ピークの数が多い点は、上記講談社現代新書の事例と似ている。また、他の 3 社の場合には、どの時期にも主題分野はほぼ同じであるのに対して、文庫クセジュの場合には、時期により出版されている新書の

主題分野に変動がみられた。

#### 4. 5. 全図書数の変位

各発行年の全図書（単行書、文庫本、新書本含む）が収録している主題の範囲は、表 4. 5 のとおりである。

表 4. 5 全図書の NDC の区分別点数

全図書	総記	1 類	2 類	3 類	4 類	5 類	6 類	7 類	8 類	9 類	計
1945-1954	1923	5960	5183	21281	9265	7539	7647	5541	3050	21647	89036
1955-1964	4472	7746	11575	31464	11561	15022	12895	9422	4774	31008	139939
1965-1974	5945	10746	20410	49636	15999	21861	18619	13408	2493	37611	197028
1975-1984	13836	20313	41293	98908	36271	44782	36963	37624	6069	69219	405278
1985-1994	13302	15207	50712	80651	28743	35957	28242	43600	4166	51703	352283
1995-2004	12287	13199	58127	87634	28874	45678	27316	96264	4252	48712	422343
2005-	6008	8022	32763	55852	22262	32310	14637	73634	2025	30008	277521
計	57773	81193	220063	425426	152975	203149	146319	279493	27129	289908	1883428

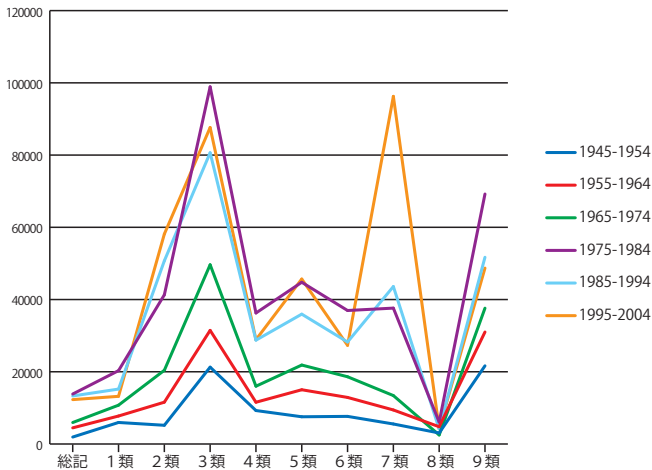


図 4. 5 全図書の NDC の区分別点数

図書全体で見ると、3 類（社会科学）、5 類（技術）、7 類（芸術）および 9 類（文学）分野の主題の資料が多いようである。ただし 5 類のピークは小さい。

## 5. 新書の主題範囲と年代による変容

図4.1から4.4まで、4つの新書本シリーズの主題分布は、多少の違いはあるものの、おおまかに見るならば、その傾向は類似している。今回の4つの出版社では、出版された新書本の主題範囲には、おおきな違いがないようである。しかも、この点は、図4.5.の全図書の主題分布とも同じ傾向である。今回取り上げなかった他の多数の新書本については今後の調査が必要であるが、全図書の傾向からみて、おそらくは、ほぼ同じ傾向になっているものと予想される。新書本であっても、単行書であっても、主題の範囲と分布には、おそらく大きな違いがないものと思われる。

なお、いずれの新書本シリーズの分布も、3類（社会科学分野）、7類（芸術）、9類（文学）などの主題領域の著作物が多いように見える。このほか、講談社現代新書では、2類（地理、歴史、伝記、紀行）の資料が一時期（戦後直後）多く見られた。逆に、4、5類の科学技術分野や8類の言語分野は、他の分野にくらべれば、いずれの新書でも発行点数が少ないようである。全図書の場合、5類（技術）にもピークがみられたが、今回の新書本では、5類は少ない。

ところで、4つの各出版社とも、1945年から2010年代に至るまで、主題の分布は多少の変化は感じられるが、大きくは変動していないようである。今回の調査の範囲では、各社、戦後半世紀ほどにわたり、ほぼ同様の主題分野での出版を続けてきたことが示されている。

また、新書本の出版点数は、戦後の初期がピークで、その後低下してきている。とりわけ、近年の発行部数は少なくなっていて、出版界の活動低迷などの指摘を裏付けている。

前述のとおり、新書本は、価格が廉価で、単行書にくらべてサイズも小さく、文庫本同様に携帯にも便利であり、総ページ数（つまりは総文字数）は単行書にくらべて少なく読みやすいことなどが特徴である。そのため単行書にくらべタイムラグの少ない出版・流通が可能であり、何かあたらしい主題、現代社会の課題など、社会が注目しているトピックに関する論述を公表する上でも有利なメディアであると思われる。そうした内容であれば、戦後直後

の混乱期、高度成長期、バブル景気の時代、その後の不況の時代……と、時代とともにピークに一定の変動がみられることが予想された。そうした仮説を立てていたが、今回の調査では、ピークの時期ごとの変動ははっきり認めることができなかった。また、新書本をも含めた全図書（全出版物）の主題範囲とくらべても大きな相違は認められず、少なくとも主題領域の分布からは、新書本の有する固有の特徴を把握することができなかった。しかし、主題分野はほぼ同じであっても、新書本の中の具体的な個々の主題が、他の一般の図書類の主題とは異なる可能性もある。この点は今回の調査では明らかにできなかった。今後、新聞や雑誌、あるいは放送などで取り上げられる主題（トピックス）や図書全般の主題と、個別に比較をしてみる必要もあろう。

## 6. おわりに

今後は、他の新書をも対象に具体的な主題の他のメディアとの比較、主題（内容）面の難易度、文章表現の難易度、漢字の種類や数などを調べるとともに、岩波新書の創刊以降、戦後になって創刊された他の新書本、とりわけ近年創刊された新書本に対しても同様の調査をおこないたい。また、読者層についても調査をおこないたい。

### 引用文献・参考文献

- 1) 「新書本における造本および主題の変容——岩波新書を例に——」, 今村 成夫, 大正大学研究紀要, 94 号, 2008.
- 2) 「新書総合目録: 2007 年版」, 新書総合目録刊行会, 2006.
- 3) 「出版年鑑: 2007 年版」出版ニュース社, 2007
- 4) “情報ファインダー”「朝日新聞 2008 年 9 月 14 日 朝刊」, 読書 3 面, p.13, 朝日新聞社, 2008.
- 5) 「岩波新書の 50 年」, 岩波書店編集部編, 岩波書店, 1988 (岩波新書;別冊)
- 4) 「文庫はなぜ読まれるのか: 文庫の歴史と現在そして近未来」, 岩野裕一 著, 出版メディアパル, 2012.

- 5) 「出版年鑑 昭和 14-16 年版」. 東京堂年鑑編輯部.. 東京堂, 昭和 14-16
- 6) 「出版の検証：敗戦から現在まで」. 日本出版学会編. 文科通信社, 1996.
- 7) 「大学図書館と新書本」. 吉田昭. 大学図書館研究, v. 38, 1991.
- 8) 「圧倒的に多い文庫本利用（学校図書館の外側にあるもの：本・新書本・マンガ・etc.）」. 特集：学校図書館の外側にあるもの. 安光哲来. 学校図書館, v.323, p.26-28, 1977.
- 9) 「利用の多い文庫本（学校図書館の外側にあるもの：本・新書本・マンガ・etc.）」. 特集：学校図書館の外側にあるもの. 細山田文樹. 学校図書館, v.323, p.32, 1977.
- 10) 「日本十進分類法 第9版」日本図書館協会分類委員会. 日本図書館協会, 1995.